

I. 序論 —「どっちとも言えない問題」にどう向き合うか

- 電車で泣く赤ちゃんをめぐる賛否両論の話。
- 「どちらが正しい」と言い切れない問題に私たちはしばしば直面する。
- キリスト者は、そのようなときどんな基準で判断し、どう行動すべきか。
- 今日の聖書箇所は「自由」「知識」「愛」の関係を通して、その指針を示している。

II. 前回の復習(8章 1-6 節)

- 「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てる」(8:1)。
- コリント教会では「偶像に献げられた肉」をめぐる対立があった。
- 正しい知識(偶像は実在しない)を持っていた人たちは自由に食べていた。
- しかしパウロは「その知識が他者をつまずかせていないか」を問う。
- 知識よりも大切なのは、**愛による配慮**。

III. 本論

1) 知識を使う上での注意点(7-9 節)

- 「すべての人にこの知識があるわけではない」(7 節)。
- 信仰歴や背景の違いにより、判断基準も異なる。
- 「弱い良心」とは、信仰理解がまだ成熟していない状態。
- 偶像文化に慣れた人には、過去の影響が残っている。
- 「あなたがたの権利が、弱い人のつまずきにならないように」(9 節)。
→ **自由の行使には愛による制限が必要。**

2) 知識の間違った使い方とその影響(10-12 節)

- 「知識のあるあなた」が偶像の宮で食事する姿を見て、
「弱い人」が誤解し、偶像崇拝に妥協する危険がある。
- それは信仰的な滅び(霊的衰退)を招く。
- 「兄弟の弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯している」(12 節)。
- タバコやお酒の例:
→ 聖書が直接禁じてはいないが、**他者へのつまずきを避けるために慎む。**
- AさんとBさんのエピソード:
小さな行動が人の信仰理解に影響を与える。
→ **私たちの自由は、他者の信仰成長を助けるために使う。**

3) パウロの決心(13 節)

- 「兄弟をつまずかせるなら、私は永遠に肉を食べない。」
- ユダヤ人であるパウロにとって肉を断つのは大きな犠牲。
- しかし、愛による配慮を最優先する。
- 正しい知識の目的は「自分を正当化すること」ではなく、
キリストの愛に生き、教会を建て上げること。
- 律法主義に陥らず、自由を愛によって制御することが大切。
→ **「知識+愛」= 成熟した信仰の歩み。**

IV. 結論 — 愛による自由の用い方

- 私たちの言動は、誰かが見ている。
- 信仰初心者や子どもたちは、先輩クリスチャンの姿から学んでいる。
- 自分の権利を主張する前に問おう：
「この行動は誰かをつまずかせないか？」
「この選択は兄弟姉妹を成長させるか？」
- 自己中心的な自由の行使は、キリストに対する罪にもなり得る。
- キリストは、私たちを救うためにご自身の自由を放棄された。
→ 私たちも愛のゆえに、自分の権利を手放すことを学ぶ。

V. 適用

- 「愛は人を育てる」(8:1)
- 知識も自由も、愛によって整えられてこそ祝福となる。
- 教会の交わりの中で、互いを思いやることが、真の自由の用い方。
- 権利よりも隣人愛を優先する生き方を選ぼう。
- 「正しい知識の用い方」とは——
主の愛に倣い、他者を建て上げるために自分の自由を用いること。